体育授業における技能評価のための質的観点について
―小学校4年生の実践事例から―

余語　政夫

Qualitative evaluation for physical education skills
―A case of the fourth grade student in elementary school―

Masao YOGO

Ⅰ　緒言

文部科学省は、平成20年3月28日に学校教育法施行規則の一部改正と小学校学習指導要領の改訂を行った。そして小学校学習指導要領は、平成23年4月1日から全面実施することとなった。体育においても、これらの問題を受けて「確かな学力」を保障することが求められ、特に「基礎的な身体能力を身に付け」[1]ることに重点が置かれている。いわゆる、「技能の保障」である。

技能を保障するためには適切な技能評価ができなければならない。しかし、評価規準の曖昧さや教師側の評価スキルの欠落などの理由から「量的な評価」や「成果主義評価」が評価の大半を占めている。しかし技能評価は量的に結果を見る評価ではなく、質的に過程を見る評価が必要なのではないかと考える。

そこで本研究では、体育の技能で求められているものを質的評価という観点から検討し、技能評価の具体的な観点を提起することを目的とする。なお、本研究は文献研究と体育授業における動きの観察・分析の2部構成とする。文献研究では、技能評価で必要な観点は何かを考えるために、評価に関する特徴を整理する。そして体育授業における動きの観察・分析では、実際の動きを質的観点で評価し、事例として表す。

Ⅱ　文献研究

1　方法

文献研究では、まず本研究に対する関連資料を収集する。資料を収集する際は観点を決めて収集し、次に収集した資料の中から研究に必要と思われる視点で文献を整理した。

資料を収集する際は、以下の観点で資料を収集した。①小学校学習指導要領解説体育編②評価の一般論③体育の技能評価④国立教育政策研究所の評価規準⑤質的な運動観察、の5観点である。

収集した資料を整理する視点は、「評価」、「技能」に関する記述について整理し、運動の技能の観点を探り、量的な評価と評価規準となる質的な評価を比較する。

2　結果と考察

学習指導要領小学校体育編の「体育科の内容」では、陸上運動系において「どのような力を持った児童においても競争に勝つことができたり」という記述や、「記録を高めることができるようにすることが大切」[2]という記述があり、競争・達成特性が強調されている。また器械運動系では「～できる」という表現が多く、「できる」「できない」の二項対立的な評価を連想させる。学校の体育授業は学習指導要領に基づいて行われるため、このような記述は量的な評価や成果主義評価を助長していると考えられる。

一方、評価の一般論の中には結果の評価を主とする評価に対して、単に素質を判定するものであると批判しており、結果の評価よりも過程の評価を大切にしなければならないとしている。また、量的な評価を主とする評価に対して、序列化の手段と批判しており、量的な評価よりも質的な評価を大切にしなければならないとしている。

また、体育の技能評価では国立教育政策研究所の「体育の評価の観点及びその趣旨」の運動技能について、「運動を楽しく行うための基本的な動きや技能を身につけている」[3] と記載してあり、技能は運動を楽しく行うための技能とし、その技能を発揮している場面が評価対象であると定義されている。

教師は子どもの過程を見なければ評価ができないという知識を持ち、子どもの動きを質的に評価できる目を持つことが必要であると考えられる。

Ⅲ　体育授業における動きの観察・分析

1　方法

⑴　対象の授業

観察対象は、A小学校4年生27名（男子13名、女子14名）が行った「高跳び」と「マット運動（倒立技）」である。

⑵　対象データ

本研究では、観察対象とした授業の「高跳び」、「マット運動（倒立技）」のなかで授業の中核部分となる、課題とした技に取り組む子どもの動きをビデオカメラで撮影を行った。

⑶　分析方法

本研究では、質的な運動観察を行うためにクルト･マイネルが示した「運動の局面構造」の3分節である、「準備局面」、「主要局面」、「終末局面」[4] を援用した。そして、その中の「主要局面」を「主要局面①」、「主要局面②」、「主要局面③」というようにさらに3分節し、それぞれの形態的な特徴について記述する。

2　結果と考察

高跳びは、準備局面である助走と踏み切り足を見ることで、その子どもの跳び方の種類をおおよそ把握することができる。

主要局面ではもっとも大きなクリアランス動作は脚の使い方を中心とするため、脚の使い方を見るべきである。例えば、はさみ跳びにつなげるのであれば、脚の入れ替えが行われているかに注目することが重要である。この時、膝をたたむことでバーをよける子どもは脚の入れ替えが難しくなるため、指導が必要になる。

側方倒立回転は、準備局面での脚の振り上げが主要局面の動きに大きく影響してくるため、膝が伸び、股関節が伸展する大きな振り上げに導くことが的確な指導だと考えられる。

主要局面では膝の屈曲が腰角度に影響し、着手の位置が立ち位置よりも遠い場合は、腰を高く上げることが難しくなる。この場合、膝・腰角度・着手が指導のポイントとなる。主要局面で腰角度と腰の高さを保てていれば、不十分な回転で終ることがない。そのため準備局面と主要局面での的確な指導が必要だと考えられる。

また側方倒立回転では、恐怖心が子どもたちの動きに影響を与えていることが言える。子どもの精一杯の動きを評価したいのであれば、場の工夫や恐怖心を軽減させていく運動課題が必要であると考えられる。

本研究は、具体的な評価の観点を提起することを目的とし、子どもの動きを質的に分析することで、高跳びでは8個、側方倒立回転では11個の動きの特徴を抽出した。

表1　高跳びの動きの分析

助走	助走
	踏み切り足
	スイング（上肢）
	挙上
	踏み切り時の振り上げ脚
クリアランス	クリア時の振り上げ脚
	クリア時の踏み切り脚
	上体

これらの特徴から、高跳びでは助走と踏み切り足を見て、その子どもの跳び方の種類を把握し、その跳び方に応じたクリアランス動作の指導を行うことができる。クリアランス動作は脚の使い方を中心とするため、主に脚の使い方をみるべきであることがわかる。つまり、「助走」と「クリアランス」が評価の観点となる。

表2　側方倒立回転の動きの分析

着手	着手の1/4ひねり
	着手の位置
	振り上げ脚
	股関節
倒立姿勢	頚椎の伸展
	腰角度
	肩の位置
	腰の位置
	脚の位置
着地	着地の1/4ひねり
	着地の位置

側方倒立回転では、振り上げ脚の動きと着手の位置が腰の高さに大きく影響してくる。また、膝の屈曲は腰角度を小さくしてしまう。そのため、振り上げ脚・着手・膝・腰角度が指導のポイントとなる。つまり､「着手」と「倒立姿勢」と「着地」が評価の観点となる。

Ⅳ　結語

評価の一般論では､「過程の評価」や「質的な評価」が必要だと言われている。しかし、体育においてもまだまだ結果の評価や量的な評価の事例は多い。学習指導要領の各教科の内容や、国立教育政策研究所の評価規準は具体的に示されているが、教師がそれらを安易に捉えることにより、評価の妥当性がゆがんでしまう。

運動の技能は、過程も評価の対象になる。評価の対象が妥当な観点を含まなければ適切な指導もできず、結果として技能が保障されない。体育授業は運動技能を中心に学習する場であるため、子どもの技能が保障されないということは、専門職である教師の義務が果たされていないということになる。そうならないためにも、教師は子どもの動きを質的に評価できる目も養わなければならないのである。

本研究では、小学校4年生の高跳びと側方倒立回転を対象に動きの分析を行ってきた。得られた結果や考察は全学年、全運動領域に通ずるものではないが、動きの過程を質的にみる観点は技術指導に役立つ。なぜなら、子どもたちが行う全ての動きには原因があると考えられるからである。教師はその原因を考察し、適切な指導を行わなければならない。適切な指導ができた時に、初めて適切な評価が行えるからである。授業中に見られる子どもの動きは教師へのメッセージだと受け止め、そのメッセージを受け止める準備をして指導にあたるべきである。

〈引用・参考文献〉

1）文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説　体育編」p.3
2）上掲書[1) p.16
3）国立教育政策研究所（2011）「評価規準の作成のための参考資料、評価方法等の工夫改善のための参考資料」http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html
4）クルト･マイネル／金子明友（訳）（2007）「マイネル・スポーツ運動学」（大修館書店）pp156−162

（指導教員　森　勇示）